

新しいふれあい社会

認定NPO法人東葛市民後見人の会

情報誌（毎月 2500 部発行）

事務局 我孫子市湖北台 6-5-20

平成 28 年 10 月発行（第 31 号）

Tel/Fax 04-7187-5657

アイツとの出会いと決別

樋場 雅子

（臨床心理士・精神保健福祉士）

ミュージシャンや俳優、アニメプロデューサー、子ども達の憧れの的だった元プロ野球選手などの覚醒剤の所持、使用で逮捕された有名人は、ここ 2 年をみても十指に余っています。

2 年と言ったのは、2 年前のこと、池袋駅近くでドラッグを使用後の酩酊状態で通行人を次々に撥ねて、死傷者 8 人もの犠牲者を出した事件がありました。この事件を機に「脱法ドラッグ」は、「危険ドラッグ」と改称され、取り締まりも強化されました。これを受け、「新しいふれあい社会」でも、**人の心を虜にし、蝕むドラッグ**と題して、3 か月にわたって話題を提供してきました。

しかし、それは市民が身近に感じられる少年の有機溶剤の乱用、依存問題、一般家庭薬でも容易に乱用、依存が生じることについての問題提起に留めました。

しかし、最近の社会情勢を踏まえて、今回は覚醒剤依存そのものにメスを入れて考えてみます。「覚醒剤依存」というと、特殊社会のもので、身も心も滅ぼされてしまうという恐怖感を覚えるのではないかでしょうか。それは実に正しい市民感覚です。一方で先に挙げた有名人の逮捕の報道に、「まさかと思ったが、やっぱり…」とうなづいた一面もあるのではありませんか。また凶悪な犯罪を犯して、尿検査で覚醒剤使用が発覚された報道に接し、改めて覚醒剤の取り締まりに対する疑問と、憤りに似た思いに駆られた方も少なくないと思います。いずれも、無意識のうちに覚醒剤の乱用が、大衆化されているのではないかという、市民の危険感覚です。

これを物語る、痛ましくも胸打つ、直近の実例を紹介します。

平成 18 年〇月〇日午後〇時、東京地方裁判所第 16 法廷。静まり返った法廷では、被告人 J が覚醒剤取締法（法 252 号）違反の裁きの時を待っていました。法廷の中央席に立った被告人に向かい、判事が「最後に被告人には何か言つことがありますか」と重い口を開きました。これに対して、被告人 J の答えは、誰もが予想もしなかったものでした。「私は覚醒剤を断つために、自分なりに努力しましたが、すべて失敗しました。みんな私の意志の弱さによるものでした。今の私の希望は、刑務所に入れて頂くことです。刑務所以外に断薬することはできません。お願いします」と一気に述べました。涙が拘置所用のスリッパを濡らしていました。一瞬、傍聴席はざわめき、母親からは押し殺した嗚咽が漏れていきました。

1 週間後に、懲役 1 年 6 カ月、執行猶予 4 年の判決が言い渡されました。釈放された J さんは、その足で母親に伴われて、以前に入院していたことのある病院の P S W の私のもとを訪れ、「入院させて欲しい」と言いましたが、病院としては、病院は病気を治療するところで生活の場ではないことを説明し、お断りしました。この時の J さんは 29 歳。社会的には立派な青年ですが、母親に付き添われて、とぼとぼと歩いていく後姿は何とも心もとなく、見送る私の方が切なく、みじめな思いに襲われていました。

家に帰ったJさんを待っていた父親は、何も言わずに、「おかえり」と迎え入れてくれました。連絡を受けて駆けつけてきた、長兄も次兄も期せずして、異口同音に「おかえり」と言いました。後日、Jさんは「おかえりという言葉は、家族としてこんな温かいものはない」と言っています。

数日を家で過ごしたあと、Jさんは勇を鼓して、かつて入寮中の自分を「覚醒剤の不法所持」で告訴したダルク※1を訪れ、再入寮を願い出て許可されました。

※1 ダルク=D・R・C→ドラッグ・アディクション リハビリテーションセンター。薬物依存者のための民間リハビリテーション施設。入寮を主としていますが、デイケアもあります。

Jさんは1年前までダルクに入寮していましたが、スリップ(再度クスリを使うこと。クスリは、非合法の薬物を意味する隠語)を繰り返して、仲間から浮いていました。仲間たちは何も言わず、勿論、説教めいたことは何も言いませんでした。Jさんは悪質者扱いされたかったが、無視されていました。その反抗心というのか、まがったプライドがさらなるドラッグ覚醒剤へと走らせました。

しかし、そんなプライドは、再入寮を願い出た時点では消え失せていました。日課になっているミーティングに際しても、「やめる」ことより「やりたい気持ち」が先走っていたことを正直に話し、「やめるべき」より「やめたい気持ち」を話すことが出来るようになりました。

薬なしのクリーンな生活が6ヶ月も続いていたある日のこと、仲間とともに小さなラーメン店に入りました。ラーメンができるまで壁に貼ってあるお知らせを読んでいると、「今日は貸しません。明日は貸します」と書いてありました。何のことかよく判らなかつたが、妙に気になって、何回もつぶやいているうちに、「今日は貸さないけれど、明日は貸してくれるということか?…。しかし、明日来てもまた今日だから、永久に貸してくれないということかな」とようやく謎が解けた思いがしました。まるで小学生の時、先生に褒められたような気持でした。NAグループ※2では、仲間たちの合言葉「FAST FOR TODAY」(今日のことだけ考えよう)というが、「まさにこれだ」と気付きました。「クスリはやめます」という言葉の魔法から解き放された思いがしました。

そして、ミーティングの場でも恐れなく、今まで生きてきたことの棚卸をすることができました。

※2 NA=Narcotics Anonymos→無名の薬物依存者の集まり。アノニマスというからには、自分の名前や住所や職業などを明かす必要はありません。「治療者と患者」という縦の関係ではなく、互いに経験と力と希望を分かち合う横の関係です。
家族と友人の集まり=NAR→ナラノンもあります。

Jさんは3人兄弟の末っ子として生まれました。両親はともに教員で、父親は公立高校の校長、母親も小学校教師として、後輩から慕われていました。長兄はそんな両親を尊敬し、感化されて、教員になりました。次兄は父方の祖父が旧制工業学校出身で、大学出の技師に頭が上がらなかつたという話を聞いて、工学部に進んでエンジニアになって祖父を喜ばせたエピソードがあります。Jさんは、この話を聞いて自分もエンジニアになりました。しかし彼が卒業した平成16年の頃は、バブル崩壊後の不況が続き、エンジニアと言えども厳しい競争と葛藤の毎日でした。

そんな或る日、Jさんを薬物依存に巻き込む出来事がありました。Jさんは、仕事が終わっても真直ぐ家に帰る気になれず、一杯飲み屋で盃を傾けていると、親しげに寄ってきた男がいました。何気ない話をしながら酌み交わしているうちに心を許し、誘われるままに、彼のアパートについていきました。そこで「お疲れのようですね。私の愛用の疲労回復剤です」と馴れた手つきで打ってくれた1本が、命取りでした。その時的心地よさが忘れられないものになってしまいました。これこそがアツとの出会いでした。

それは、デザイナードラッグと呼ばれ、法によって規制されているドラッグの化学構造式の一部を替えて取締まりから逃れようとするドラッグ(アンフェタミン)で、今でいう危険ドラッグです。その作用は、ドパミンを大量に放出させて、眠気や疲労感を取り除いて、精神作用を活発にします。これらは覚醒剤の主な作用と同じで、乱用、依存に容易に進んでしまいます。

Jさんが薬物に溺れるようになってから1年もたたず、給与はすべて薬物の購入に使い果たし、なお足りず、友人知人から借金を重ねた末、母親が老後のために銀行に預けてあった定期預金を、ヤクザと組んで狂言芝居をして解約させるなど、薬物を得るための金策には手を尽くしました。

一方、そんな自分に対する惨めさに苛まれ、「自分は一体どうなるのだろう、なんでこうなってしまったのだろう」と思い悩むようになり、遂に意を決して、精神科病院を受診しました。

病院では「薬物依存症」と診断され、父親の同意による医療保護入院として、閉鎖病棟への入院となりました。依存薬の乱用を断つためには、どんなに薬に対しての渴望や衝動が著しくなっても、薬が入手できないところに身を置かなければなりません。そこで薬を断ち、離脱症状を乗り越える治療を受けながら、長期乱用で痛めた肝臓、心臓、血管系の身体合併症の検査、治療を進めます。これを解毒治療と呼んでいます。

解毒治療と同時に、精神症状の治療が求められます。薬の乱用を長く続けていると、精神科的な異常性がみられるようになることが少なくありません。その代表が覚醒剤の使用の場合で、幻覚や妄想、激しい興奮などがみられることですが、その現実を認識できない自分に気付いていないのが、特徴です。もともと潜在していた精神科的疾患が、薬物乱用で顕在化したという考え方もありますが、薬物乱用がなければ、発症しなかったはずとも考えられて、薬物依存の一環として治療されます。重ねての乱用さえなければ、こうした症状は治療によって次第に改善されていきます。

けれど、これで薬物治療が終わったわけではありません。断薬を決意したものの、スリップして、本人も家族も「やはり駄目だったか」と失望してしまう例は後を断ちません。薬物依存とは大変な病気だということを知っておかなければなりません。欠かすことの出来ないのは、依存の治療です。治療法は個々により違いますが、自助グループは欠かすことの出来ない絶対的な存在です。

この一連の物語の主人公Jさんも、あの裁判の日から10年、ダルクに入寮して、NAにも参加、紆余曲折はありましたが、クリーンな生活が、まる10年となりました。この間に家族もNARに参加して、共々に苦節10年、Jさんにも春が巡ってきました。Jさんはダルクの女性スタッフと結婚して、沖縄のダルクに、回復者スタッフとして赴任するということです。

思いもかけず、10年ぶりに「覚えていますか。私は薬物依存のJです。アソブともやつと決別できました」と言って、電話を掛けてくれた明るい声は、私に一気にこの一文を書かせました。

これはフィクションではありません。10年余、覚醒剤を相手に戦ってきたJさんの実体験です。そこには、「人の心を虜にし、蝕む覚醒剤の問題」そのものを語る、いわばドキュメントです。

覚醒剤の乱用は、昭和54年頃よりバブル崩壊後の景気低迷と教育荒廃のなかで、増加の一途をたどり、遂には昭和56年には、第3次覚醒剤乱用期へと突入し、現在に至っています。

覚醒剤乱用と言えば、家庭的に恵まれず、両親の不和や離婚など、崩壊状態の家庭で生育して、本人にも犯罪歴があったり、暴力団にも関係している反社会的傾向が強いという印象があります。ところが、昨今は女性を含め一般人、それも若者の間に、覚醒剤の乱用、依存者が増えています。現代社会は多かれ少なかれ、誰しもがストレスを抱えています。その生きづらいストレスこそが、覚醒剤を含めた多くの薬物乱用者、依存者を生み出すシステムを秘めているのです。

苦しくも厳しい就活を乗り越えて、希望をもって入社した会社は、学歴や技能、職種や地位など、いずれも中身がなく、自分を活かす場がありません。そんな若者に悪魔は密かに囁きます。

「これは疲労回復剤です。精神安定剤です」と言葉巧みに、白い粉を水に溶いて静脈に注射すると、1分もたたない間に、不快な気持や疲れは一掃されて、頭が冴えてくるような感覚に満たされます。幸福感、高揚した気分に満たされ、その快感が忘れられず、何度も経験したくなり、止めようとしても止められなくなります。自ら注射をすること、粉末をアルミ箔の上にのせて下から火で炙り、その煙をストローで吸う方法も覚えて、もはや自分の意思ではドラッグが断てなくなってしまい、遂には、健康や家庭、職場を無視してまでもドラッグを求め、生活は破綻してしまいます。

覚醒剤の乱用者、依存者は若者だけではありません。一般女性に多いことも特徴となっています。暴力団が資金源を確保するためと考えられています。彼らは「気分がよくなる」「やせ薬」などと巧妙に女性に近づき、ユーザーの拡大を図ります。彼女たちは手軽に高収入を得られる手段として、援助交際をしたり、風俗業で働くことを計算した上でのことと考えられています。

とまれ、覚醒剤の問題は決して他人事ではありません。すべての人が「大変な病気である」と、自覚しなければなりません。覚醒剤の乱用と依存のメカニズムを学び、どのような状況にあっても断固として、薬に対する悪魔のささやきを退ける意志の強さを持たなければなりません。

万一、乱用、依存に陥った場合は、解毒治療に留まらず、完全な断薬、依存に対する治療に当たらなければなりませんが、その際に社会的な役割をこなして、自尊心を取り戻すことを目標にして欲しいものです。一人で治すのではなく、みんなの力を借りて、たとえ失敗しても挫けないことを忘れないでください。

Jさんの正直な実体験を教えとして、安易な気持ちでドラッグに近づかないことを切に祈ります。

〈こころの電話相談室〉

心の悩み、心のケア、心の健康に関する電話相談室をご利用下さい。

相談日 毎週木曜日 午前9時～午後9時

相談担当 横場主任相談員 電話番号 04-7100-8369 個人情報は厳正に取り扱います。

〈籠が緩んだ社会への警鐘〉 ★覚醒剤の乱用者、依存者による悲惨な事件が後を断ちません。最近は医療保護入院、措置入院などの言葉が耳目を引きます。本事例のように、10年に及ぶ苦闘の末に悪魔と決別し、回復者スタッフとして再出発されるJさんの活躍に期待したいと思います。★テレビや雑誌やネット上には刺激の強い、ときには有害な番組、記事、写真、動画が氾濫しています。あまりに軽薄な社会から子どもたちを守るために、健全で地道な教育を繰り返し、徹底する以外に方法がありません。★教育現場に望みたいことは、第1に障害児・者に対する偏見・差別・いじめの禁止、第2にドラッグの撲滅、第3に性教育の徹底。いずれも健全な社会を維持するための常識です。せめて月1回、30分の授業を小学校1年生から実施できないものでしょうか(h)。

〈東葛市民後見人の会の活動をご支援ください〉

★私たちは、「新しいふれあい社会」を通して地域の課題を提起し、〈こころの電話相談室〉を通して家族や家庭が抱える心の悩みの相談支援を行なっています。毎月10件を超える厳しい相談や反響が寄せられるたびに一緒に悩み、元気づけられます。★ひきこもりの若者や家族の相談・支援は等閑にできない難題です。社会とのつながりを持つことが解決への道とされるので、私たちもアウトリーチ(訪問支援)を試行します。★こうした活動は一般のご寄付(1口3000円)で支えられています。引き続き温かいご支援をお願い申しあげます(当会へのご寄付は所得税、法人税等の控除対象となります。連絡先04-7187-5657)。